

私の Facebook 体験記

環境教育実践センター・教授 岡本正志

1. Facebook に誘い込まれてしまった

ツイッター、ブログ、フェイスブックなどなど、次々と耳なれない言葉が飛び交っている。私のそもそもの専門は通信工学なのだが、学んでいたのは40年以上前のことで、まだ電子管などの講義が中心であったし、コンピュータといえば大型計算機のことであった。電電公社の武蔵野電気通信研究所に液晶の研究を見に行ったことがあったが、10cm 大の液晶に ABC という文字を映し出すことがやっとできはじめたばかりで、これからはこの技術が急速に進歩するだろうという研究者の説明にワクワクしたことを覚えている。学内でも、当時の最先端技術の研究者を招いて、さかんにコロキウムのようなことがおこなわれており、液晶の第一人者による非晶質物性の講演にいたく感心したりしていた。私自身は誘電体薄膜の電磁的な特性を調べていたのだが、技術発展がこれほど急速に行われるとは思ってもいなかったし、インターネットという巨大なネットワークが出現することなど想像もしていなかった。今日では、通信の意味合いが過去とはまったく異なってしまった。世界中と簡単にコミュニケーションできる時代となったことにあらためて感心してしまう。

こうした私だが、以前は自分の WWW ページを編集、公開していた。しかし、数年前に閉鎖してから今日まで再開していない。そうこうするうちにブログとかツイッター、フェイスブック（以下 FB と略す）などが登場してきたわけである。中東の政治革命にずいぶん影響を与えた、などという報道がなされていたので「どんなものだろうか」とは思っていたが、何となくピンとこないまま手を出すことは控えていた。

2011 年の夏、留学生の研修旅行を引率することになった際、家政科の Y 先生と一緒したが、旅行後に、その写真をインターネット上のアルバムに公開しておきました、とメールをいただいた。「インターネット上のアルバム???」、Y 先生は何やらすごいことをしているのだろうか、公開されたアドレスに従ってネット内のアルバムに導かれることになった。それが FB に触れた最初である。正確に言えば、それ以前に、知り合いから、FB を始めたので友人登録をしてほしい、というメールが何通か届いていて登録をしたことはあったが、訳が分かっていなかった。

Y 先生のアルバムを見てから、Y 先生の FB をのぞくようになり、友人登録をすることになったが、やがて音楽の T 先生から FB をするように、との命令が下った。T 先生は、私の所属する委員会のヘッドであったので、否応なく登録することになり、よりコミットすることになったのである。

こうして時々、Y 先生などの FB をのぞいていたが、食事した料理の話が次々と登場して、Y 先生がいかに美味しく楽しい毎日を過ごしているのかがインターネットを通して送られてくる。料理も良いが、他の情報のやりとりも欲しいと思っていたので、時間があつた時に、少し発信してみるか、と初めて簡単な文章を書いてみた。もっとも使い方があまり良くわからないままにいつの間にか発信されてしまい、自分の FB をつくることになってしまったのである。それが今年（2012）の4月のことである。

2. Facebook とはなにか

FB には、日々のできごとなどを書く近況欄や、少し長めの文章を書けるノート、写真をまとめたアルバムなどが用意されていて、様々に発信できる。しかも、FB に接するには登録が必要であり、友人になるには承認を経なければならない。内容の公開を友人のみに制限することもできる。このように、ある程度はクローズされているので、多少は安心かもしれないと思って、「甲賀庵のくらし」とか「私の散歩道」、「農場実習のようす」などを時々掲載するようになった。もっとも私の場合、FB は公開してあるので、登録している人は誰でも見ることができる。したがって顔写真などは載せないようにしていたのだが、アッという間に「ともだち」登録した留学生によって公開されてしまった。

こうして FB を始めてみて、私の経験から気づいた FB の実態について書いてみよう。

まず、FB はきわめておせっかいである。何かを書くと、登録した人々に、岡本が何か書いた、とお知らせメールが送られる。あるいは友達の誰かが FB をいじると、即座に私にもメールが届く。

FB には、「いいね」というボタンがある。書いてあることに興味をもてば、このボタンを押せばよい。あるいは、読んだということを相手に知らせるためにもボタンを押すことができる。そのすぐ下には「コメント」という欄もあるので、簡単に何らかのコメントを書くことができる。しかも、操作した者が誰なのかも示される。つまり、誰が「いいね」を押したか、誰が「コメント」をしたくれたのが FB 作成者にも伝わるしくみになっているのである。FB を公開している場合には、その FB を訪れた人すべてにそうした情報がわかるようになっている。これは通常の WWW ページやブログなどと最も異なっている点であろう。誰でも、情報発信をすれば、その情報がどのように受け取られたのか気にかかるが、FB はそこをうまく設計して、お互いのやり取りを促進するような仕組みとなっているのである。

こうした仕組みは、文書ばかりでなく、アップする写真にも付けられている。「タグ」というしかけが備えられていて、公開した写真の中に友達が写っていれば「タグ」を付けることができるが、そうするとその写真が相手の FB にも自動的に貼付けられるのである。私の写真が公開されてしまったのは、「ともだち」になった留学生が私の写真をタグづけして送ってきたからである。そこにはご丁寧に「岡本先生」とメモまで入っているので、とうとう私の貧相な姿が公開されてしまったわけである。

ではこうした仕掛けの中で、FB 内ではどのようなやりとりが行われているのだろうか。

すでに見たように、様々なしかけによって簡単に FB を作ることができるのだが、簡単であるということは長所でもあり、短所ともなる。私が発信した内容で言えば、反応があるのは食事である。甲賀での私のくらしは、朝 5-6 時頃に起床して畑に行き、そこで収穫した野菜を朝食の材料とする。私はそれが嬉しいので、FB に写真入りで「今日の朝食」などと紹介してみた。そうすると、すぐに「いいね」と反応がある。それに味をしめて今度は「散歩道」の写真をアップしてみた。自分では、まことに美しい里山の散歩道だと思うのだが、まったく反応がない。また、ちょっとした近況を報告したものには反応があるのに、少し真面目な文章を書いてみると反応がない。

たとえ反応があっても、書いてくるコメントは、基本的に 2 こと 3 ことである。よく見ると「携

帯から」アップしている。私は流行りの携帯は持っていないので、FB を見る時もアップする時も机の前に座ってパソコンから行う。だからすぐに反応はできないし、ゆっくり書いたり読んだりしたいのだが、世の中はそうではない、ということにやがて気づくことになった。これは私のFBにかぎったことではなく、私の「ともだち」のFBでも事情は同じように見える。もっとも、当初の「ともだち」は、Y先生やT先生などごく少数の人をのぞけば、学生や留学生たちであったので仕方ないかと思っていた。FBの世界の住人の多くは彼らであるので、そこでの会話の正体が上記のような軽いやりとりであることには逆らえないとも思っていたのである。

そのうちに少しずつ「ともだち」が増えてきたが、若者でなくても、その内容は上とさほど変わらない。肩を張って小難しいことを書くのではなく、日々のくらしのちょっとした様子を、たとえ価値があろうかなかろうが、誰かに伝えたい人が世の中にたくさんいるということである。

私の世代では、FBをしている者はまだ少ない。したがって同じ研究者仲間でコミュニケーションすることはない。しかし、時には思わぬ人から連絡が届くこともある。先日、イランとメキシコからコメントが届いた。前者は私がイラン訪問をしたときにお世話してくださったイラン文部省の役人である。すでに退職してトルコに住んでいるようだが、私とFBの「ともだち」となっている。メキシコからは、以前に私の研究室に留学してきていた学生からであったが、今、メキシコの大学院で学んでいるとのことである。科学史と物理教育の古い友人からも「ともだち」の承認をもとめるメールが入った。私は基本的には自分から友達請求をすることはないが、何かのきっかけで私がFBをしていることが伝わるようである。

彼らのFBも、内容は大差ない。趣味や生活の断片をみんなに報告して元気な様子を知らせているということだろうか。自分の考えや訴えたいことを書くのはブログなどの役割で、FBはつながりを持ちたい人の「絆をたもつツール」なのだろうと思う。ただし、うまく使えば世界中の人々とコミュニケーションできることは間違いない。私自身はまだそのようには使えておらず、日常を交歓する絆の一つとして利用しているにすぎない。便利な世の中になったのだが、こうしたネット上の絆が、どれほど豊かな内実をもつのだろうかと、いらぬ心配をするこの頃である。